



<全国会議>

毎年6月23～29日は、国の男女共同参画週間。今年6月27日に東京国際フォーラムにて「男女共同参画社会づくりに向けての全国会議」が開かれました。スローガンは、公募で選ばれた「走り出せ、性別のハードルを越えて、今」でした。

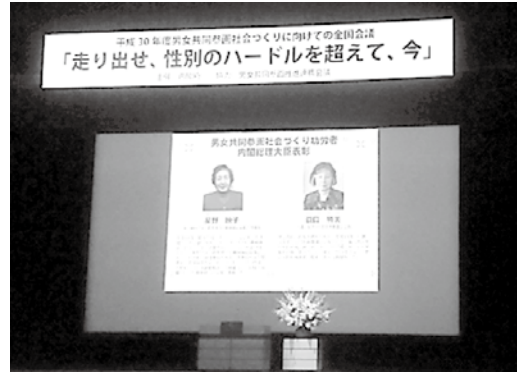
基調講演は、野田 聖子内閣府特命担当大臣が、女性という視点も含めた国の取組みについて話されました。

次に、特別応援メッセンジャーとして、元テニスプレーヤーの杉山 愛さんが登場し、世界各国を巡った経験をもとに、テニス界の女性の立ち位置や引退後のことなどを話されました。

パネルディスカッションのテーマは、「スポーツを通じた女性の活躍」です。東京大学医学部産婦人科の能瀬 さやか医師は、女性アスリートはエネルギー不足からくる無月経や骨粗しょう症などの症状が多く、月一回の検診の必要性を強調。また、カナダ在住の国際パラリンピック教育委員のマセソン美季さんは、障がいがあっても出産し子どもがいても、人はスポーツにおいて無限の可能性があるという、日本との意識の違いを話されました。

山口 香筑波大学教授は、引退後のキャリアの難しさと、指導者になる人も少ない現状を踏まえ、女性アスリートに特化した支援をしていきたいと語りました。また、渡辺 守成国際体操連盟会長は、日本のスポーツ界は後進国であると、はっきり言い切り驚きましたが、こうして一歩一歩が進んでいくのではないかと思います。

コーディネーターの小笠原 悦子順天堂大学大学院教授の巧みな進行によって、真摯で活発な意見が交わされ、有意義な一日となりました。



<有名女子大がトランスジェンダー受け入れ>

お茶の水女子大が2020年度入試から、戸籍上の女性のほかに男性のトランスジェンダーも受け入れることを正式に表明しました。米国の女子大ではすでに門戸を開いているケースも多いのですが、日本では初めてのことになります。

トランスジェンダーは、生まれつきの自分の性別に違和感を持つ人々の総称です。医学的概念では「性同一性障害」と診断されます。同大学では診断書がなくても対応したいとしています。



具体的な確認方法などは、米国の女子大を参考にすることも考えています。大学では性別に関係なく使えるトイレや、本人が望む名前の使用を認めるなどの配慮をしています。さらに学生らによる支援体制も構築できているそうです。

室伏 きみ子学長は、女子大はトランスジェンダー研究が充実し、学生は偏見や差別に合うことも少ないと話しています。今後はもっと多くの大学が「多様な性」に対応して欲しいと思います。